

頸動脈瘤を呈した血管型 Behçet 病の 1 例

蜂谷 貴 金子 寛 三岡 博 中村 達
馬場 正三 小谷野 憲 一*

症例は 52 歳男性。1986 年、両下肢に皮疹が出現し結節性紅斑と診断された。1989 年 8 月ごろより左下腿に潰瘍を形成、静脈造影で左膝窩静脈から大腿静脈までの深部静脈血栓症と診断した。穿通枝結紮術を行い潰瘍は治癒した。1991 年 11 月、52 歳時、右頸部腫瘤を自覚。CT で壁に血栓を伴った直径 4 cm の動脈瘤を認め、血管造影にて動脈瘤は内外頸動脈分岐に存在した。1992 年 2 月、Dacron 人工血管で血行再建術を施行したが人工血管周囲に無菌性膿瘍を併発、1992 年 9 月やむなく人工血管除去、頸動脈を結紮した。頸動脈瘤を呈した Behçet 病の本邦報告例は 7 例で、5 例において血行再建術がなされていたが他の 2 例は合併症により頸動脈結紮となった。本症の特徴を考慮し瘤切除のみにとどめ血行再建を行わない術式も考慮されよう。日心外会誌 24 巻 2 号：136-139 (1995)

Keywords: Behçet 病, 深部静脈血栓症, 頸動脈瘤

A Case of Carotid Artery Aneurysm Associated with Vasculo-Behçet Disease

Takashi Hachiya, Hiroshi Kaneko, Hiroshi Mitsuoka, Satoshi Nakamura, Shozo Baba and Kenichi Koyano* (Second Department of Surgery, Hamamatsu University School of Medicine, Hamamatsu, Shizuoka, Japan and Department of Surgery, Hamaoka Hospital*, Shizuoka, Japan) Ulcer developed on the left leg of a 47-year-old man, in 1989, and phlebography showed deep vein thrombosis extending from the popliteal to the common femoral vein. Subfascial ligation of the perforators achieved healing of the ulcers. In November 1991, at the age of 52 years the patient noticed a pulsatile mass on the right side of his neck. CT scanning showed a carotid artery aneurysm 4 cm in diameter. Angiography indicated that the aneurysm was located at the bifurcation of the carotid artery. In February 1992, reconstructive surgery was performed with a Dacron graft, but an anterile abscess developed around the graft. In September 1992, the graft was removed and the carotid artery was ligated. Only seven cases of carotid aneurysm associated with Behçet's disease have previously been reported in Japan. Five of them underwent reconstructive surgery and two of them underwent carotid ligation due to complications. Because of the clinical course of Behçet's disease, carotid aneurysmectomy without reconstructive surgery may be the procedure of choice. Jpn. J. Cardiovasc. Surg. 24: 136-139 (1995)

Behçet 病は口腔粘膜アフタ性潰瘍、外陰部潰瘍、再発性眼病変および皮膚病変を主症状として青壮年男子に発症する原因不明の全身性炎症性疾患である。その副症状として認められる血管病変は動脈閉塞、動脈瘤さらに静脈閉塞など多彩な病変を呈する。今回われわれは深部静脈血栓症の経過観察中に頸動脈瘤を発症した不全型 Behçet 病の 1 例を経験したので文献的考察を加え報告する。

症 例

患者：1939 年生まれ、男性。

主訴：右頸部拍動性腫瘤。

家族歴：特記すべきことなし。

現病歴：1986 年、47 歳時、両下腿に腫張と熱感を伴った紅斑が出現、結節性紅斑と診断された。1989 年 8 月、50 歳時より左下腿内側に潰瘍が出現、20×30 mm と増大傾向を認め当科受診した。ドップラー血統計による検査で大小伏在静脈に逆流はなく、不全穿通枝の関与が示唆された。順行性静脈造影では膝窩静脈から総大腿静脈まで閉塞していたが、血栓症の発症時期は同定できなかった。

1994 年 2 月 23 日受付, 1994 年 6 月 2 日採用
浜松医科大学第 2 外科 〒431-31 浜松市半田町 3600

* 町立浜岡総合病院外科
本論文の要旨は、第 13 回血管外科合同研究会 (1993 年 7 月, 名古屋) において発表した。

た。潰瘍の原因は静脈血栓後遺症によるものと考え、1990年4月、Lim's手術による筋膜下穿通枝結紮術を施行した。術後潰瘍は治癒し以後の再発はみられなかった。この間に陰部潰瘍を呈したが保存的に治癒した。1991年9月、52歳時、嚥下時に咽頭痛が出現、同11月には右頸部に5×3cmの拍動性腫瘍を自覚した。

検査所見：血液検査では白血球数7,900/mm³であったがCRP7.5mg/dl血沈55mm/1時間と炎症性反応を認めた。抗核抗体は80倍以下であったが、抗DNA抗体は陽性であった。CTでは壁に血栓を伴った最大横径4cmの動脈瘤を右総頸動脈に認めた(図1上)。また血管造影で動脈瘤は内外頸動脈分岐部に存在し、外頸動脈は瘤より分岐するように観察された(図1下)。眼科的検索では異常所見は得られなかったが陰部潰瘍の既往、結節性紅斑、さらに深部静脈血栓症などを考慮し不全型Behçet病と診断した。

手術：1992年2月、頸動脈瘤に対し手術を行った。総頸動脈、瘤末梢の内頸動脈は剝離、遮断が可能であったが、外頸動脈は確認できなかった。総頸動脈と内頸動脈の間に外シャントを作成し、瘤を切開すると外頸動脈の入口部を確認、これを縫合閉鎖した。総頸動脈と内頸動脈間を径8mmのDacron人工血管で再建し、吻合部をDacron

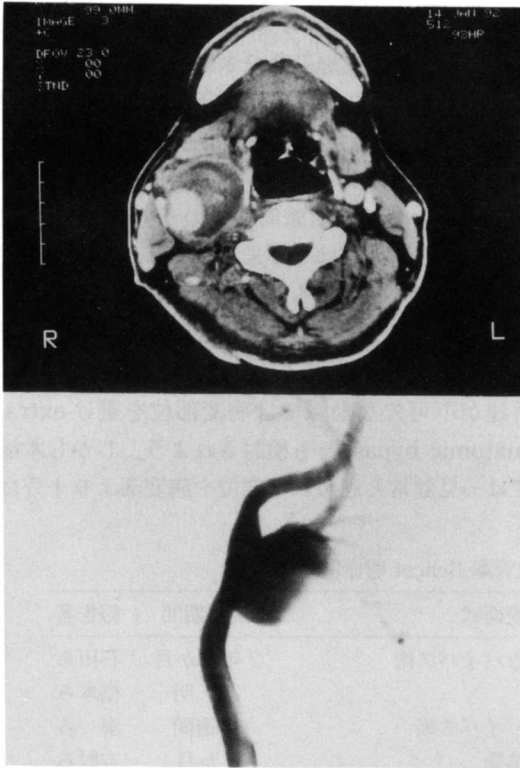


図1

直径4cmの壁に血栓を伴った動脈瘤がみられ、頸動脈分岐部に存在する。

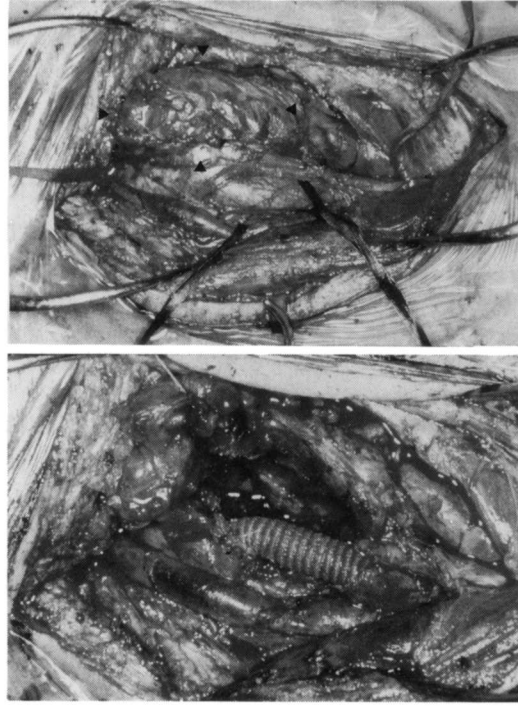


図2

瘤は分岐部にあり(矢印)総頸内頸動脈間をDacron人工血管で置換した。



図3

著明な炎症細胞浸潤と繊維化がみられる。(HE染色ルーペ像)

